

19. 肝胆道スキャンが診断に有用であった Biloma の 7 例

大谷 泰雄 田中 豊 後藤研一郎
津久井 優 三富 利夫 (東海大・二外)
鈴木 豊 (同・放)

肝・胆道外科術後の胆汁漏出は、大きな合併症の一つであり、腹腔内に胆汁が限局性に貯留した場合に、いわゆる“Biloma”となる。Biloma は、抗生剤などの使用により腹腔内の感染巣として残り、弱毒菌感染のために、術後経過を不良とするもので、CT scan・Echo でも、しばしば診断困難で処置が遅れる場合があり、他の画像診断方法の活用が望まれている。

肝切除、肝のう胞の開窓術、PTCD、肝管空腸吻合、肝外傷の縫合止血などの術後に生じた Biloma 9 例に肝胆道スキャンを施行し 7 例を診断し得たので、Biloma における肝胆道スキャンの有用性について報告した。

肝胆道スキャンは、CT scan・腹部超音波検査で腸管との鑑別が困難な症例に、特に有効であった。なお、Biloma の診断には、Biloma への流入する胆汁量が少量であるため、通常よりも観察時間を延長した方が良い。

20. 小児骨シンチグラフィの検討

山岸 嘉彦 奥山 厚 玉井 仁
山本 彰 赤石 健 鍛 喜美恵
高岩 成光 福永 淳 篠原 義智
疋田 史典 佐藤 雅史 渡部 英之
(日医大・放)

日本医科大学付属 4 病院放射線科において、1965 年 6 月 1 日から 1966 年 5 月 31 日までの 1 か年間に施行されたシンチグラフィ数は、6,259 例であり、骨シンチグラフィは、1,243 例であった。この中で小児の骨シンチグラフィは 44 例であり、腎について、Ga とともに 2 番目であった。

小児骨シンチの目的あるいは適応につき、その頻度をしらべたところ、原発性骨腫瘍がもっとも多く 43.3% を占め、次いで炎症、痛み、軟部腫瘍、転移性骨腫瘍、骨折、無腐性骨壊死の順であった。

成人では、転移性骨腫瘍の評価が最も多いのに比べ、特徴的であった。各項目についての症例を供覧した。

21. 小児腎シンチグラフィの検討

藤野 淡人 岩村 正嗣 穎川 晋
池田 滋 石橋 晃 (北里大・泌)
中沢 圭治 依田 一重 石井 勝己
(同・放)

過去 14 年間に経験した小児の腎シンチグラフィ 315 症例について、統計的観察とともにその有用性について検討し、若干の興味ある症例を呈示した。

対象は過去 14 年間に腎シンチグラフィが施行された 15 歳以下の小児例、315 症例で、検査回数は総計 532 回であった。対象疾患としては尿路感染症が 68 例と最も多く、次いで、水腎症、血尿の精査、腎移植術後、などの順であった。検査回数は 1 人当たり、1~9 回、平均 1.7 回で、特に腎移植術後には平均 4.4 回の反復検査が施行されていた。最後に、本検査法の小児腎尿路系疾患の診断法における臨床的意義について、他の画像診断法との比較もまじえて検討した。

22. 神経芽細胞腫における I-131 MIBG の使用経験

中島光太郎 菅原 信二 石川 演美
秋貞 雅祥 (筑波大・臨床)
島山 六郎 田村 正夫
(筑波大附属病院・放)

Guanethidine の類似物質として副腎髄質に親和性のある I-131 MIBG は、Neural crest 由来の腫瘍の局在診断に優れた薬剤として注目されている。

筑波大学附属病院では、昭和 59 年 11 月より 61 年 6 月にかけて 6 例の神経芽細胞腫に対して計 13 回のスキャンを行った。

スキャン像は、従来 24~48 時間後のものより 48~96 時間後に撮像する方がよりよい像が得られた。

6 例の神経芽細胞腫のうち、治療前にスキャンの行われた 3 例では、原発巣、転移巣を全て描出することができた。治療終了後の経過観察として行われた 3 例では再発や転移を思わせる異常集積を認めなかった。

また、骨髄浸潤のある 1 例では、骨髄への異常集積が明らかに認められ、治療経過とともに集積が低下していくのが観察できた。

今後の課題として、経過観察の指標として定量的評価